

## 1 国語

## 言葉に強い関心をもとう

## ☆「言葉による見方・考え方」

平成 28 年 12 月の中央教育審議会の答申において、「言葉」は「学習活動を支える重要な役割を果たすもの」であり、「全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである。」との記述があります。

また、国語科における見方・考え方は、「言葉による見方・考え方」であり、言語活動を充実させることによって国語に関する資質・能力を育成することが大切です。

## ☆『源氏物語玉の小櫛』より

「物語は、儒仏などのしたたかなる道のやうに、迷ひを離れて悟りに入るべき法にもあらず。また国をも家をも身をも治むべき教へにもあらず。ただ世の中の物語なるがゆゑに、さる筋の善悪の論はしばらく差し置きて、さしもかはらず、ただもののはれを知れる方のよきを、取り立ててよしとはしたるなり。この心ばへをものにたとへていはば、蓮を植ゑてめでんとする人の、濁りて汚くはあれども、泥水を蓄ふるがごとし。物語に不義なる恋を書けるも、その濁れる泥をめでてにはあらず、もののはれの花を咲かせん料ぞかし。」

人が人として暮らすための、大切な基盤の一つは言葉です。言葉の力を高めることは、あらゆる意味で人生を豊かにすることにつながります。学校教育の中で、言語に関する能力の育成を目指し、直接かつ計画的に指導を行うのは国語科ですので、その役割と責任は極めて大きいと言えるでしょう。まずは、あなた自身が、国語の教師として言葉に強い関心を持ちましょう。

## 既存の価値観を問い直してみよう

本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』で、物語の価値について語る部分に「物語は善悪を論ずるものではない」という趣旨の一節があります（左欄参照）。この部分は、国語の授業の在り方を考える上で、重要な点を示唆していると思います。

ともすると、国語の授業は、物事の良し悪しを学ぶ時間になりがちです。しかし、国語の授業で身に付けるべきは、何が正しいのかという「答え」ではなく、それを自分で「感じる力」や「考え、判断するための力」です。例えば、学習指導案の単元や本時の目標に「主人公の悲しみを理解する」と書かれていることがあります。しかし国語の授業で大切なことは、そこにある“悲しみ”を、教師の説明によって理解させるのではなく、その心情が“悲しみ”なのか“怒り”なのか“喜び”なのか、生徒が自分自身で「感じる力」「考え、判断する力」を身に付けさせることなのです。そのためには、教師の側で、その心情を“悲しみ”だと規定してしまうことは、とても危ういことだと言えるでしょう。

これは物語に限りません。評論文も同様です。そこに書かれている「内容を知る」ことが最終的な目標なのではなく、自力でそれを「読み解く力」や、そこに書かれていることの真偽や本質を「吟味し判断する力」を身に付けることこそが最終的な目標なのです

つまり、国語科の教師に求められているのは、「文章内容の分かりやすい解説」を行うのではなく、「生徒が主体的に文章に向き合い、自分自身で感じたり、考えたり、判断したり、そして想像したりする場」を授業の中につくりあげ、生徒の言語に関する能力を育てていくことだと言えるでしょう。

## 言語に関する能力を育むための授業づくり

「内容の解説」を行うのではなく、「言語に関する能力を育む」には、どのようにすればよいのでしょうか。基本は学習指導要領の指導事項です。国語科の各科目で身に付けさせたい力が、指導事項という形で示されています。同じ教材であっても、取り上げる指導事項によって授業展開は異なってきます。

〈例〉 国語総合（読むこと）

### ◇『羅生門』を「読むこと」の教材とする際の授業展開例

「国語総合」の「読むこと」の指導事項は、以下の四角に囲んだア～オの5つです。身に付けさせたい力（指導事項）が異なれば、同じ『羅生門』を扱う場合であっても、授業展開や学習活動を変えなくてはなりません。身に付けさせたい力を付けるために最適な学習活動を考えることが授業づくりの第一歩です。

#### ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。

【学習活動例】 『羅生門』に見られる「動物を用いた比喻表現」について、文章の内容とどのように関わり、どのような効果を上げているか、ということ进行分析し、整理し、まとめる。

※ここでは、文中の表現効果に焦点を絞っています。小説を授業で扱う場合、「心情」の理解に偏りがちです。しかし、「表現」そのものの学習も欠かすことはできません。この二つは作品を読む上で不可欠な要素ではありますが、授業という場では、今身に付けさせたい力はどちらなのかを明確にしましょう。そして、目標に応じてアプローチ方法や発問の仕方も変えなくてはなりません。例えば「○○という心情が分かる表現を探す」と「△△という表現はどのような心情を表しているかまとめる」とでは、どちらが効果的かを意識して発問しましょう。

#### イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。

【学習活動例】 『羅生門』の内容を整理し、相手に伝わるように工夫をし、文庫カバーや帯、POP等にまとめ直す。

※ここでは、文庫カバーや帯、POP等の作成が「要約する」ことにあたります。1種類でなく複数の様式を一度につくらせたり、小学生向けなど対象者を設定することで、「必要に応じ」た要約方法を学ぶこともできます。

#### ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。

【学習活動例】 『羅生門』の続きを、本文における登場人物の描かれ方に応じて書く。

※これは、比較的よく行われる活動ですが、何のためにやるのかが重要です。『羅生門』の続きを書くということは、すなわち下人のその後を書くということです。下人の行動を予測するためには、本文の表現に即して下人の人物像や心情を読み取ることが不可欠です。単元の最後に、おまけの活動として続きを書かせるのではなく、生徒には、単元の初めに「より良い続きを書くために、まず下人がどのような人間か考えよう」という課題を投げ掛けることで、生徒も何を目的とした学習活動なのか分かれます。

#### エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。

【学習活動例】 『羅生門』を本文の構成や展開、場面設定に留意しながら紙芝居にする。

※小説を「脚本化」する活動は、ト書きを詳しく書かせることで、指導事項イ「詳述をしたりする」や、指導事項ウの学習に効果的に働きます。似たような活動ですが、「紙芝居」は、どこで場面を切り分けるかを考えさせる活動が中心となりますので、構成や展開を学ぶことに効果を上げます。

#### オ 幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしたりすること。

【学習活動例】 古典を題材として書かれた小説を読み、その内容や特徴をまとめ、比較する。

※『羅生門』は『今昔物語集』を題材として書かれた小説です。原典と本文の読み比べは、「書き手の意図」をとらえることとなりますので、指導事項エの学習に効果的です。指導事項オの学習の場合には、『羅生門』そのものを考えるというより、『羅生門』をきっかけとして、古典に材を取る他の小説を幅広く読み比べ、そこから古典を現代にいかすことの意義を考えることなどへとつなげていくことが必要です。

ここでは、『羅生門』を「読むこと」の教材として取り上げましたが、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の教材とすることも可能です。

このように同じ教材であっても、指導事項（身に付けさせたい力）が異なれば、授業の展開自体が大きく異なります。これが〈教科書「を」教えるのではなく、教科書「で」教える〉ということです。重要なことは、これらの学習活動を一つの単元に詰め込まないことです。もちろん実際に授業を進める際には、いろいろな要素が入りますが、核となる目標は精選し、「一つの単元に一つの指導事項」を基本として、授業を組み立てていきましょう。